

---

# 一瞬の風になるために

五言

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一瞬の風になるために

### 【著者名】

ZZマーク

### 【作者略】

五言

### 【あらすじ】

陸上競技と高校生の青春ストーリーを重ねた作品です。初めての作品のため、下手くそですが、よろしくお願ひします。

## はじまり

「セツト…バン…！」

計8レーンから横一線で選手が飛び出す。

「いっけーいけいけ…！…いけいけ光太…！」

スタンドから応援がどぶ。

中学校地区大会決勝。

三位までに入れば、県大会までの道は開ける。

光太は最高のスタートをきつた。

フライングはなし、皆が拮抗した力をもつているため、スタートで、順位が決まるといつても過言ではない。

光太は全身全霊の力を出した。

回りの景色が過ぎていく。

ゴールあと20m。

太股が重い…乳酸のバカヤロ…！…

他のレーンの選手との差はほとんどない。

駆け抜けなければ負ける。

光太は走った。

風になるため。

たつた一瞬でも…

あと10m…

「…夢か…」

光太は目を覚まし、ゆっくり体を起こす。

机には中学校の時の写真が何枚も。

メダルも何個も並んでいた。

「いやー…

布団の上で寝てたのが、飼い猫のシャムが抗議の声をあげた。

「また、そんなところで…自分のところで寝ろって何と思つてんだ…」

光太はため息をつきながら、シャムを抱え部屋をでた。

台所からは、朝食のいい臭いがしている。

「母さん、父さん、おはよー」

台所では、光太の父と母がいた。

一人ともまだ、ラフな格好をしている。

「「おはよう、光太。」」

見事なはもりである…

「あら？ シャムちゃん！ また、光太の部屋に潜り込んだの？」

シャムは、ニヤー…と小さく返事をした。

「仕方のない子ね…まあいいわ…光太、朝御飯は？」

「走つて、シャワー浴びてからにするよ」

といつと、光太は着替えて、外に出ていった。

## 早起きは三文の徳？（前書き）

ちょとした、人物紹介です。

この四人が、これから鍵を握るかも…  
という感じ（笑）

いつになつたら女子出でくるのかな～

## 早起きせいか文の得?

光太は、日課であるランニングを終え、シャワーを浴び、朝食を食べ、学校に向かつた。

ちなみに今日は実習がある。

なんの? 農業の…

光太が通う高校は「県立柏森農業高校」である。

昔からある高校で、県内でもかなり大きい高校である。

偏差値は、下から数えた方が早い高校だが、農業を通して心を養う事大切にしている。

ちなみに部活は盛んで、結構どの部活もいい成績までいく。

ちなみに陸上部は…

はつきり言つて弱い…

そんな、ダークな部分は置いといて、今日も学校に早めに着いた。

着替えを済ませ、グラウンドに顔を出す。

すると、そこには先客がいた。

「みんな、おはよー……」

光太は先客達に向かつて挨拶をする。

「光太…おは～」

「おはよひびきやります。」

「おひばこよ～」

いろんな、返事が返つてきた。

最後のはなんだ?

「ミッキー元気ないな～…まだ眠いの?」

「うん…」

ミッキー」と三ツ木心。

生物生産科一年。

いつでも眠そうである。

「仕方ないよ、光太…ミッキーは走れば元気になるから、それまで待とう」

陽気な男の子はミッキー」と松木真。

農業機械科一年。

「マスコット的な存在でいつも、和ませてくれる。」

「マッキーの言つ通り……俺なんて朝から、三回ね……ふはつ」

強烈なボディがはいる。

ちなみにいたのは、マッキー。

ボディを入れられたのは、食品科学科一年、四木幸助。

「四木はあいかわらずだな（笑）」

光太は呆れながらも三人のところに寄っていく。

ちなみに光太は生物生産科。

三人とは陸上部で知り合った。

まだ、目の前でじやれてる二人は同じ中学校出身で、サッカー部あがりで、荒削りながら、足は早い。

もう一人のミッキーは、中学の時は帰宅部だったらしい。

しかし、1人でトレーニングするのが好きらしく、結構いい体付きをしている。

100mもけつして遅くない。

「はいはい。ミッキー起きて、一人はバトンとストップウォッチを準備……」

光太は、苦笑しながらも、指示を出し、朝練を開始した。

ちなみに、この四人が柏森農業のリレーメンバーである。

#### 閑話休題

朝練が終わり、各自着替えていると、校舎のほうから、スース姿の男の人が歩いてくる。

気づいた、光太はすぐに朝の挨拶をし、それに皆が習つた。

「おう…おはよー…ほれ、朝のエネルギーだ」

1人ずつ、熟れたトマトを渡された。

四人は揃つて頭を下げ、トマトにむしゃぶりついた。

「くぅ…さすが、取れたて…味が違つぜ」

「ほんとだね 美味しい」

「…これで、目が…美味しい…」

「先生毎回ありがとうございます…！」

皆が、夢中でもしゃぶりつかなか、光太は顧問に頭を下げた。

「気にはんな お前達が頑張つて、それに答えなければ、顧問じやないからな（笑）」

がははははと笑う顧問。

顧問の名は、佐藤雄。

陸上は、三年目で主に投擲を教えているが、短距離も教えている。

教科は農業である。

「さあ、四人とも早く着替えて戻らないとな……うわあ……朝会始まる……！」

では！と手をあげ、陸上走りで帰っていく。

結構おっちょこちょいな先生だ（笑）

「さて、三人とも早く行くよ……遅刻したら、また佐藤先生に怒られるから……！」

三人はトマトに夢中になつていて気づかなかつたが、結構ヤバイ時刻である。

急いで着替え、四人はグラウンドを後にした。

## おぬ朝の風景（前書き）

といひて、ヒロイン登場

二人は双子。

好きなのは…逆タツ みたいな（笑）

でも、両方とも生きるから（笑）

## ある朝の風景

四人は、教室の前に着くと放課後にと、別れていった。

光太は教室に入ると、窓側の一一番後ろの席に座った。

ここはいわゆる特等席と呼ばれる場所。

日当たりよし、空氣よし、寝るによじと三つ揃つた場所である。

「光太おは～今日も朝練？」

光太が座ると隣の女の子が声をかけてきた。

「おーはー涼子……朝練だよ……今日も明日も明後日も～」

とか歌つてみた（笑）

「そか……はい、おにぎり」

「サンクス」

光太は涼子からおにぎりをもらつ。

ちなみに、女の子は中清水涼子。

家はでつかい農家で、長女であるため家を継ぐために、この学校に入学した。

ちなみに、中学校から一緒に陸上部のマネージャー兼選手もやってもらっている。

成績は常に上位、スポーツ万能、容姿最高みたいな奴だ。

そんなやつに、おにぎりをもらつと、周りが許さないわけだ：

「おい、皆！また、光太が涼子さんからおにぎりをもらつてるぞお！！」

と、ここは男ばかりのクラス、皆が群がり、おにぎりを食べるのを阻止する。

「うわあ…またお前らかよ～！！」

光太はなす統べなく、おにぎりをとられ解放された。

このクラスには女子が二人。

それも、二人ともメチャメチャかわいいのだ。

1人は先程、光太におにぎりを渡した涼子。

そして、もう1人は…

「…光太…これやる…」

物静かな感じだが、実習になると性格が代わる、中清水奈々子。

苗字から分かるように、涼子と奈々子は双子なのだ。

しかし、性格が間逆なためどちらかというと、涼子の方が人気があるが、奈々子も密かに人気がある。

「おう…ありがとう…お 」

敵がおにぎりに集中している間に、奈々子がくれたのは、カロ－メイト。

「ナナ、サンキュー 」

コクンと頷くと自分の席に戻る。

ちなみに席は窓際の一番前だつたりする。

ナナにもらった、固形物を食べると隣からメチャクチャ怖い視線が俺に刺さってきたけど、無視します

「キーンゴーン…」

鐘がなり、担任の広大先生が入ってきた。

「早く座れーーおし…朝のHRを始める…」

ちなみに、部活の顧問のため、広大先生が教室にいるときはいたつて真面目である。

「…………連絡は以上 今日は一日実習だからなー着替えて農場に集合ー遅れたものは罰として当番実習にかす…！」

そういうと、先生は教室を後にした。

にこやかに喋るが、放課後と朝に行う実習は高校生にとっては最悪である。

先生がいなくなつた瞬間皆が着替えだした。

ちなみに、校舎から農場までは徒歩で10分以上かかる。

只今の時間、8時45分。

開始時刻9時丁度。

今日も1組から氣合の声がこだまする。

ちなみに女子は、農場近くの更衣室で着替えるため、先生が出ると同時に更衣室に向かつた。

## 朝の風景（後書き）

陸上から離れてすいません…

もつげよいしたら、陸上になります。

## 実験 = 練習（前書き）

今日は簡単な農業実習の話。

次回は待ちに待った、部活連の話です。

## 実験＝練習

「はーい、全員セーフ…そこで、碎けている君ー立ちなさいー。」

「は、農場。

野菜や果樹、畜産、食品加工、土木、農業機械 etc…がある。

今、全員で走って整列しているのは四ヵからの強制訓練のたまものである。

最初の「は」は、馬鹿らしく走る人も少なかつた。

そして、広大先生はにこやかに言った。

「はー…全員で校内敷地5周！」

といふから不満の声が上がる。

「OKーんじゃ、今から走らないやつ、無条件で農業科目ーなー！」

といふことで恐い事言つてくる。

「先生がそんなことできるのかよー。」

どうからか、そんな質問が飛んできた。

他の連中もそれに便乗し、ブーブーと膝のよつに鳴いている。

「うへんまあ、お前らが信じないならそれでいいけど…後悔するなよ…はい、じゃあ、行くやつだけ俺についてこい。」

「あ、丈夫さん、後ろから救護車お願いします！」

と、ガガガガガと後ろからエンジン音が聞こえた。

後ろに荷台のついたトラクターが待ち構えていた。

「はい…じゃあ、出発…!…!」

広大先生が小気味よく走り出した。

光太は先生が陸上部の顧問ということもあり、後ろについて走り出した。

後ろには中清水姉妹がいて、他に何名かがついてくる。

クラスの約半数といったところだ。

後の半数はスタート地点に居座っていたと思つたら、丈夫先生と話したら、青い顔して追いついてきた。

何やら、さつきの成績1の話は本当らしく、何年か前に来た生徒が意地でも走らなく、結果一学期の農業科目の成績が全部1だつたらしい。

それから、この学校では逆らってはいけない先生ベスト1になつたらしい。

ちなみに、やられた生徒は丈夫先生らしい…

（閑話休題）

そんなこんながあつて、今があるのである。

「よ～し、全員整列！」

広大先生が来た同時に皆が、整列する。

「はい、じゃあ名前呼ぶから返事しろよー！」

一人ずつ確認し、今日の実習内容の説明があつた。

今日の実習は、一人一区画（3m × 3m）の畑を耕し、畝立てをし、マルチを張る + まで行つ。

ちなみにこの作業、かなり単純で簡単そうだが、実はものすごい重労働である。

そのため、一日実習になつてゐるのである。

「はい、それではクワ・スコップ・ネコグルマを用意すること。班ごとに分かれ協力すること。何か質問があれば遠慮せずに私が、丈夫さんにすぐに聞くこと。あと、けがをするなよ！以上、作業開始！」

と、生徒たちは散開し道具をもつて自分の持ち場に去つていった。

クワを振ること、それすなわち筋肉トレーニング。

スコップで掘ること、それすなわち筋肉トレーニング。

ネコグルマを押すこと、それすなわち筋肉トレーニング。

石を拾うこと、それすなわち観察眼トレーニング。

農作業、それすなわちトレーニング。

このように、農作業はなんらかのトレーニングに属する。

これを一日やるのだ、今日は絶対に筋肉痛になるな…

放課後も練習あるのに…

光太はマルチとスコップ、クワをネコグルマに乗せそんなことを考えながら自分の担当区域に向かった。

実習終了後、全員がへとへとだったが、先生がアイスをくれた瞬間に生き返ったのはいつまでもない。

いつも通り、生徒は餌付けされていくのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7484z/>

---

一瞬の風になるために

2012年1月5日17時53分発行